



他動性とヴォイス(態) : 意味的他動性と統語的自他の韓日語比較研究

鄭, 聖汝

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1999-03-31

(Date of Publication)

2009-02-03

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲2030

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.11501/3172970>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002030>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・（本籍）	チョン 鄭	ソン 聖	ヨ 汝	（韓 国）
博士の専攻分野の名称	博士（学 術）			
学位記番号	博い第313号			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
学位授与の日付	平成11年3月31日			
学位論文題目	他動性とヴォイス（態） —意味的他動性と統語的自他の韓日語比較研究—			
審査委員	主査 教授 柴 谷 方 良 教授 西 光 義 弘 助教授 窪 蘭 晴 夫			

論 文 内 容 の 要 旨

要 旨

本論文は、他動性とヴォイスの関係を追究し、韓日両言語のヴォイスの体系を明らかにすることを目的としている。ここで取り上げる内容は、(i) 他動化と使役化は、いかに連続しているか。(ii) 自動化と受動化は、いかに連続しているか。(iii) 使役と受動の関係は、ヴォイスの意味的対立として捉えられるか、という3つの観点から構成される。

この3つの観点が要求される理由として、第1に、韓国語は、接辞*-i* (*-hi*, *-li*, *-ki*) という1つの文法形式が自動詞と他動詞、使役と受動などすべての文法範疇に用いられているが、それはなぜ可能なのか。第2に、韓国語と日本語の受動は、使役のように結合価の増加をみせる場合がある。その場合、使役と受動は同じ構造をもち、有生主語の行為の方向性を中心とする意味的対立をもつことになるが、それはなぜかという問題が存在するからである。

第2章から第4章までは、使役化の観点から他動性の問題を中心に上げ、第5章から第7章までは、受動化の観点から態の派生関係を取り上げる。最後に、第8章の結論では、韓日両言語における態の派生関係とヴォイスの体系を提示する。態の派生関係の研究においては、柴谷(1997b)、Shibatani(1998a)で提出された、態のプロトタイプの発露による能動、中相、受動の3つの態範疇を導入し、その範疇を決定付けている「対比最大化の原理」に基づいた分析を行う。

まず、第2章では、日本語の観点から語彙的使役形（他動詞）と生産的使役形の選択を決定するパラメータを提出する。日本語との比較における韓国語の語彙的使役の問題点は、たとえば、日本語では生産的使役形しか存在しない「笑わせる」や「読ませる」などが、*wus-ki-ta* と *ilk-hi-ta* のように、接辞*-i* を用いる語彙的使役形に対応していることにある。ここで、なぜ韓国語は日本語と違って、語彙的使役構文の目的語の位置に有生のヒトを許容する範囲が広いのか、という問題が浮かび上がる。

第3章では、このような現象を引き起こす根本的な要因は、韓国語の動詞の自他の体系が日本語と異なっているところにあることを議論する。そのために、従来の研究でかえりみられることのなかった韓国語の言語事実を提示する。この言語事実には、他動詞である基本形動詞がさらに他動化派生を

するにもかかわらず、対応する2つの構文の関係が「結合価変化のない構文」として現れている。即ち、項の増加をみせず、統語的にまったく同じ構造を作る、という問題が存在するのである。一般的に、他動詞である基本形動詞が他動化に向けてさらに派生形を作ると、使役構文を形成するものとして理解される。しかし、これらの動詞の場合は、形態の派生と統語上の対応関係が一致しない、というところに問題点がある。したがって、基本形と派生形の区別は、形態と統語の対応関係でなく、形態と意味の対応関係を問題にすべきであることが指摘される。ここで、韓国語の動詞の自他の対応は、意味を基準にした他動性、つまり「意味的他動性」に基づいていることを提案する。

第4章では、韓国語の語彙的使役は、意味的他動性に基づいた派生形動詞が使役に展開することによって発達したと仮定する。したがって、結合価変化のない派生形動詞が使役構文を形成するためには、項の増加が必要とされるが、それはいかにして果たされているのか、という問題を考察する。たとえば、*ssis-ta*（自分の体を洗う）と *ssis-ki-ta*（他者の体を洗う）は、基本形と派生形の対応関係において結合価を増加させない。しかし、同じ派生形でありながら、*ssis-ki-ta*（洗わせる）のように結合価の増加をみせる構文も同時に存在しており、この場合は、前者と違って統語的にも意味的にも使役構文として理解される。このような言語事実を受け止めるためには、結合価変化のない派生形他動詞から結合価変化のある使役への展開を仮定する必要がある。それによって、意味的他動性に基づいた派生形動詞がいかに使役と関連しているかを浮き彫りにすることができる。

ここで浮かび上がる重要な点は、派生形動詞と基本形動詞の意味的対応関係が、*cwu-ta*（やる）と *pat-ta*（もらう）の意味関係と類似する、ということである。つまり、派生形動詞を用いる語彙的使役と授与動詞は、次のような相関関係をもつ。(i) 語彙的使役の補充形式に、*-cwu-ta* が用いられている。(ii) 2重対格の現われ方が一致する。(iii) 両者はともに、「他者指向性」の意味的特徴をもつ。また、基本形動詞と *pat-ta* は、第6章で議論されるように、受動表現として用いられることがある。

次に、第5章では、態派生関係と受動化の全体的な問題点を概観し、態の変換を文法関係の変換として捉える従来の研究では、正しく取り扱うことができなかつた、自動詞の態対立の問題を取り上げる。韓国語の自動詞の態対立は、古典ギリシャ語の能動と中相の態対立のように、意味対立を基本にするものであると位置づける。日本語との相違は、パラメータの値の違いとして説明できることを試みる。即ち、受動に参加する日本語の自動詞は、有生のヒトと潜在的能力をもつモノ (*animate & potent*) のパラメータをもつ (cf. Shibatani (1998a)) が、中相と受動に参加する韓国語の自動詞は無生のモノと非意志性のヒト (*inanimate & non-volitional human*) のパラメータをもつ。このパラメータは、日本語のみならず韓国語も第2章で提出した使役のパラメータと一致する点で注目すべきである。さらに、パラメータ値の提示により、日本語の自動詞の受動の発達と比べて韓国語の未発達の理由、つまり、韓国語では、能動と受動の対立より、能動と中相自発の対立をなす動詞が多い、という言語事実に対する理由を的確に説明できる。

第6章では、韓国語の目的語残留受動の問題を、再帰と使役の2側面の関連から取り上げる。まず、韓国語の再帰と非制御性再帰を位置づけて、非制御性再帰 > 受動への展開を想定する。この場合、中相範疇に存在しなかつた目的語が、受動への展開とともに現れて、項の増加が果たされていることが観察される。この場合、項の増加は、非制御性再帰の意味特徴である被害性の要素を最大化する方向に向けて発達した結果、伴われたものであることを指摘する。このような展開過程を受け入れると、なぜ、中相から受動への展開において結合価を増加させる必要があるのか、という根本的な理由を説明しなければならない。なお、日本語の受動文も同じ理由で説明できるものが望まれる。ここでは、

韓日両言語の受動構文が使役構文とクロスリンクする理由を、意味的他動性における「対比最大化の原理」に求めて、両者の関係をヴォイスの意味対立として捉えることを提案する。

この提案を受け入れると、「教える」と「教わる」のような授受動詞も態対立の中で捉えることが可能になる。さらに、韓国語の場合は、*pat-ta*（もらう）のような意味的自動詞が受動表現に用いられるが、その理由も説明できる。たとえば、日本語の「愛される」や「妻が夫に殴り殺された。」に対応する自然な韓国語は、「*salang-pat-ta*」, 「*anay-kanamphyen son-ey mac-a-cwuk-ess-ta.*」(妻が夫の手に当たって死んだ。)のように表現される。前者の *pat-ta* と後者で用いられている2つの基本形動詞は、自分の領域に行為が納まる、という意味的自動詞の意味特徴に基づいて受動を代行している表現であることがわかる。

最後に、第7章では、統語的自動化の連続線上に表れる自発、可能、受動について考察する。韓国語の場合、統語的自動化においては、接辞*-i*の他に、助動詞*-ci-ta*が用いられている。しかし、この2つの形式は、自発や可能の範疇を共有するものの、統語的受動化（統語的基準による受動化）においては、接辞*-i*より助動詞*-ci-ta*が適切である。即ち、これは接辞*-i*が意味的受動化（意味的基準による受動化）に関与するのに対して、助動詞*-ci-ta*は統語的受動化に関与することを呈するといえる。このような*-ci-ta*受動は、日本語の無生受動（非常の受身）と比較されるものである。さらに、自発においては、韓国語が日本語より遙かに広く分布している点も指摘する。

以上のような議論を通して、本論文では、使役と受動を1つにまとめあげる文法範疇として意味的他動性を提示する。即ち、使役と受動は有生主語の行為の方向性を問題とするヴォイスの対立であり、それは意味的他動性に基づく文法的意味の最大対立をなすものと位置づける。このような結論は、韓国語の接辞*-i*のように、1つの文法形式が自動詞と他動詞、使役と受動などすべての文法範疇に用いられる、ということがなぜ可能なのか、という問題を出発点としたことによって導かれたものである。したがって、ここで提出する意味的他動性は、韓国語の動詞の全体的なパラダイムを解明するとともに、韓日両言語のヴォイスの体系を明らかにするものとなる。さらに、受動と使役の関係は、韓国語以外にも広く観察され（たとえば、中国語）、本研究は韓日対照研究を越えたレベルの構文論研究にも質するものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国語と日本語の比較研究を通して、他動性とヴォイス（態）の関係を明らかにすることをその目的としている。具体的には、韓国語にみられる態接辞*-i/-hi/-li/-ki*の機能の解明と、それと日本語の態表現との比較研究を通して態現象の本質を探る点に主眼が置かれている。

構成は、第1章の序論における問題設定、使役化を巡る諸問題を取り上げた第2章から第4章、受動化を取り扱った第5章から第7章、そして終章第8章における結論となっている。本文だけでも400字詰めに換算して800枚以上の大著である。

まず、序論では韓国語の態接辞*-i/-hi/-li/-ki*の用法から、本研究の問題設定を行う。これらの、音韻的環境によって形を変える接尾辞は、動詞の自他の対立ばかりでなく、受け身形の派生にも、使役形の派生にもその姿を現す。この事実を踏まえ、他動性とヴォイスの関係について、(i) 他動化と使役化はいかに連続しているのか、(ii) 自動化と受動化はいかに連続しているのか、(iii) 使役と受動の関係は、ヴォイスの意味的対立として捉えられるのか、という三つの観点から考察することを、本研究の目標として設定する。

第2章から第4章にかけて、語彙的使役形と生産的使役形の選択基準の追究を通しての韓日語間に見られる動詞の自他体系の相違を論証する。その論拠とされているのが、韓国語に見られる結合化変化のない他動化派生である。筆者は韓国語における動詞の自他の対応は、統語的特性を基準にしたものでなく、意味を基準としたもの、つまり「意味的他動性」に基づいたものであると説き、さらに結合化変化のない他動的派生から結合化変化のある使役形への派生がいかに展開されたかを考察し、他動性の意味の拡張としての使役形の出現を想定する。

第5章から第7章にかけては、他動化、使役化とは現象的には逆の様相を見せる、自動化および受動化について考察する。態の派生関係と受動化の全体的な問題点を概観し、伝統的な態研究の枠組では適切に取り扱えなかった自動詞の態対立について焦点を当てる。日本語に比べて、自動詞の受け身が発達していない韓国語の状況については、韓国語の態対立は能動・受動よりも、能動・中相という対立を基盤としていることによるのではないかという論を展開する。

さらに、韓国語の目的語残留受動形式を、再帰と使役の2側面から取り上げ、非制御性再帰から受動への展開を想定し、これによって使役と受動の交差を捉える。さらに、自動詞化の連続線上に現れる自発・可能・受動の関係について考察を深め、使役化と受動化にまつわる顕著な現象のすべてを網羅的に取り纏め、意味的他動性の概念のもと、使役・受動およびそれぞれに関連する諸現象が統一的に捉えうることを論証する。

終章の結論においては、態研究における意味的側面の重要性を総括し、文法研究における意味論研究の中心性を訴えるとともに、本研究の韓日語対照研究を超えたレベルでの意義について述べる。

以上が論文概要であるが、本論文は、その内容において多岐にわたる貢献が認められ高く評価される。第一に、従来断片的にしか取り扱われてこなかった韓国語の態接辞*-i/-hi/-li/-ki*の総合的記述・分析である。かつての研究では、使役化接辞、あるいは受動化接辞として、その異なった、また部分的な側面しか取り扱われてこなかった、これらの接尾辞を自動化・他動化、そしてその延長線としての受動化・使役化という観点から包括的に捉えたことは、韓国語研究上の大いなる貢献として高く評価されるであろう。

次に、受動化と使役化という一見逆の様相を呈する態現象が、韓国語のみならず他の言語に於いて共通の形態素によって表されることが従来から指摘されていた。しかし、この現象の意味するところ、さらにはそれが関与する現象の範囲については明確にされてはいなかった。本研究はこの問題に正面から取組み、態現象の広がり、そしてそれらを貫く意味特徴を明らかにした功績は大である。

最後に、従来はもっぱら統語的他動性を中心に研究が進められてきた態現象について、その全貌の解明には意味的観点からの追究が不可欠であるということを明らかにし、文法研究における意味論の中心性を明確な形で示した点も高く評価できる。

このように、優れた内容を持つ本論文であるが、その論述については少なからぬ問題がある。一つには、日本語が母語でないということによると思われるが、全体的に説明が冗長に走るきらいがあり、論点がぼやけてしまうところも各所に見受けられる。

このような論文作成における技術面での修行の余地は大いに認められるものの、本審査委員会は本論文の内容を高く評価し、論文提出者鄭 聖汝が博士(学術)を授与されるに足る資格を有するものと判定した。